八木秋子の軌跡

戦前戦後の思想風土に抗し続ける

西川 祐子

全三巻の『著作集』

八木秋子を戦後世代に最初にひろく紹介した文章のタイトルは「己れの足跡をけしつつ生きる昭和のアナキスト・八木秋子」(秋山清、『婦人公論』一九七二年五月号)であったことをおもいだす。しばらくして彼女と、戦後のなかでも一九七〇年世代との出会いを記念する八木秋子個人通信『あるはなく』(編集人相京範昭、小平市花小金井南町三の九二九)と『八木秋子著作集』全三巻(通信「あるはなく」編集、JCA出版)の刊行がはじまった。

第一巻『近代の「負」を背負う女』(一九七八年)には彼女が戦前に発表した評論と小説が収められている。第二巻『夢の落葉を』(同年)はふるさと木曾における幼少年時代を描いた物語集である。そして最近、出版された第三巻『異境への往還から』は、戦後に書いた作品を集め、安保の年をはさむ一九五九年から六一年にかけての「日記」を収めている。彼女が、読めることばとして残した「足跡」はこれで余すところなく拾われた。

もっとも著作集にあらわれるのは決して連続と集積ではない。収められているのは彼女の生涯のさまざまな時期の生活に密着した文章であるが、重要な地点にさしかかると文章は途切れて、あいだにことばの無い大きな空白が残されている。幼少年期の後にくるはずの四年の結婚生活と子どもを置いた家出、離婚について触れた文章はほとんど無い。

何度も新しい出発

離婚後、八木秋子は東京で新聞記者となった。大正の終わりから昭和のはじめにかけては長谷川時雨の『女人芸術』、高群逸枝の『婦人戦線』の同人となり、同時にアナキズム運動に加わった。だが活発な評論活動も一九三二年を境にぷっつりと途切れている。恐慌のあおりで疲弊した農村に農民自治のコンミューンをつくろうとする農村青年社運動をおこし、実践活動に入ったからである。

だが資金つくりを目的とした窃盗事件がおこり、運動は破綻し、逮捕者をだした。事件後、農村青年社は解散したが、関係者は再び逮捕され、彼女も治安維持法違反に問われて下獄している。出所後、満州(現中国東北部)に渡って満鉄の留守宅相談所に勤務した。戦後、引き揚げてからは母子寮の寮母となって一九六二年六十七歳まで働いた。退職後八十一歳までは生活保護をうけながら四畳半の部屋でひとり暮らしをした期間が長かった。一九七六年、東京都立養育院に入寮、現在は八十五歳である。

八木 秋子さん

八木秋子は生涯にいくども全てを捨て集団を離れ人と別れ、書いた作品も忘れて新しい出発をした。日本の近代の女たちの多くは家出を出発点にして自分を確認し、彼女たちによって多くの家出小説が書かれたのだが、彼女は書かなかった。書かなかったのは家出がただの家出でなく子を捨てての孤独な脱出であり農村青年社事件についても最後の離脱は「幽囚の愛人をつき離」す冷酷な行為として自覚されたからである。だが彼女は弁明をやめて沈黙をまもろうとしたのではない。あるとき自由がいだく深淵を「無頼の世界」とよび、これを書くのが文学だと語ったことがある。彼女が己の行為の必然性を追究し、自分でなければ書けぬものを書くことに残りの生涯を賭けようと決心したのは著作集第三巻にある「日記」の時期であった。

豊かな空白の部分

だが計画された自伝的大作は作品として結晶しえなかった。彼女は客観的な眼をもち腰をすえて書く作家たろうとしながら、なお行動にとびこんでゆく生き方をかえなかった。「日記」には現実を生きることと創作にうちこむことの間を激しく往き来し、他方で失職、老齢、孤独と貧困に追われる緊迫した心理が描かれている。彼女はその後、未完の大作のあるべき読者にむかって、投稿とか長い手紙の形でメッセージを送りつづけた。虚空に消えそうであった発信を最後に受けとめたのが自分も悩みながらさまよい、不安のアンテナを張っていた世代であったのは偶然でない。

一九七七年から通信『あるはなく』の発行がはじまり、十五号を重ね、現在は八木秋子の健康の回復を待って休刊中である。真剣な問いかけに触発されて彼女が鋭い輝く文体で書きはじめ語りはじめたのは現代の果てにある養育院の生活であり、生涯の空白の部分についてであった。著作集は読めば読むほど書かれていない空白にさそいこまれ、その豊かな空白を知るには著作集に残されているテキストを読まねばならないという逆説的な「本」である。わたしたちがこれを読み、彼女の軌跡を追いもとめるのは、戦前と戦後の近代、日本の思想風土に抗しつづけて立つ彼女の存在に強く心ひかれるからであろう。

(フランス文学者)